



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学のA0入試：10年間の推移と課題
Author(s)	竹山, 幸作; 山岸, みどり; 池田, 文人 他
Description	原著
Citation	大学入試研究ジャーナル, 21, 105-110
Issue Date	2011
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49271
Type	journal article
File Information	exam21_105.pdf



【原著】

北海道大学の AO 入試

—10 年間の推移と課題—

竹山幸作，山岸みどり，池田文人，鈴木誠，柴田洋，宮本淳，喜多村昇
(北海道大学高等教育推進機構)

北海道大学の AO 入試は，平成 22 年度入試にて節目の 10 年を迎えた。本学 AO 入試の推移を振り返ると，総志願者数が緩やかに減少している中で，志願者数を維持している募集単位と，志願者数を大きく減らしている募集単位があることが明らかになった。また，合格者数が募集定員を大きく下回ることが，翌年以降の志願者数減少につながる可能性があることがわかった。平成 23 年度の総合入試導入を柱とする入試制度の大幅な改革により，AO 入試の位置づけがどのように変化するかを注意深く見守る必要がある。

1 はじめに

北海道大学の AO 入試は，平成 13 年度入試で初めて実施された。AO 入試初年度は，経済，歯，薬，水産，理（化学科，地球科学科）の 5 学部 6 学科での実施であったが，これまでに教育，農（農業工学科，農業経済学科），工（応用理工系），理（数学科，物理学科，生物学科）が加わり，平成 22 年度は 8 学部 13 学科で AO 入試が実施された。本学 AO 入試は 2 段階選抜を実施している。第 1 次選考は，志願者から提出された調査書，個人評価書，自己推薦書，諸活動の記録（一部学部）に基づいて学力及び学習意欲や目的意識などを含めた選考を行っている。そして，第 2 次選考では課題論文と面接を課し，第 1 次選考で用いた調査書等の評価を踏まえ，総合的に各学部（学科・系）のアドミッションポリシーに即した選考を実施している。なお，工学部応用理工系と農学部農業経済学科は，センター試験の結果も併せて総合評価を行っている。

北海道大学における AO 入試は平成 22 年度入試にて 10 年の節目を迎えた。さらに，平成 23 年度には総合入試（大括り入試）の

導入を柱とする入試制度の大幅な改革を実施する。総合入試とは，従来の学部別募集とは異なり，文系・理系単位で学生を募集し，1 年次終了時に本人の希望と 1 年次の成績を基に各学部へと移行する制度である。また，詳細は 4 章にて説明するが，AO 入試に関しても廃止，新設などの変更がある。

以上のような背景を踏まえ，今後の本学入試制度の改善に役立てるとともに，平成 23 年度以降の新しい入試制度を評価する際の比較対象とすべく，本稿では過去 10 年間の本学 AO 入試を回顧する。2 章で AO 入試志願者の量，すなわち志願者数の推移について検証し，3 章で AO 入学者の質を大学院への進学状況という観点から検証していく。

2 AO 入試志願者数と合格者数の推移

大学全入時代の到来とともに，大学間による受験生獲得競争が激化している中で，本学 AO 入試も志願者数が減少傾向にある。志願者数の減少は，選抜効果の低下を引き起こし，質の高い学生の確保に悪影響を与える可能性がある。また，志願者減による受験料収入の減少が大学運営に与える影響も小さくない。

表1 北海道大学 AO 入試志願者数と倍率の推移

学部・学科(系) ¹⁾	募集定員 ²⁾	志願者数 ()内は倍率									
		H.13	H.14	H.15	H.16	H.17	H.18	H.19	H.20	H.21	H.22
教育学部	2		4 (2.00)	9 (4.50)	4 (2.00)	5 (2.50)	6 (3.00)	6 (3.00)	6 (3.00)	4 (2.00)	
経済学部	10	60 (6.00)	63 (6.30)	55 (5.50)	42 (4.20)	41 (4.10)	63 (6.30)	42 (4.20)	46 (4.60)	50 (5.00)	31 (3.10)
理学部	数学科	2					5 (2.50)	7 (3.50)	2 (1.00)	9 (4.50)	5 (2.50)
	物理学科	5					10 (2.00)	12 (2.40)	10 (2.00)	10 (2.00)	7 (1.40)
	化学科	10	19 (2.38)	30 (3.00)	22 (2.20)	13 (1.30)	20 (2.00)	25 (2.50)	16 (1.60)	17 (1.70)	8 (0.80)
	生物学科	5			35 (7.00)	33 (6.60)	20 (4.00)	15 (3.00)	22 (4.40)	30 (6.00)	18 (3.60)
	地球科学科	8	24 (4.80)	13 (2.60)	15 (3.00)	16 (3.20)	10 (2.00)	11 (2.20)	21 (4.20)	17 (3.40)	8 (1.00)
歯学部	10	24 (2.40)	27 (2.70)	24 (2.40)	25 (2.50)	21 (2.10)	20 (2.00)	19 (1.90)	25 (2.50)	19 (1.90)	9 (0.90)
薬学部	10	105 (7.00)	108 (7.20)	80 (5.33)	55 (3.67)	44 (2.93)	37 (3.70)	33 (3.30)	42 (4.20)	25 (2.50)	22 (2.20)
工学部応用理工系	11		39 (2.29)	20 (1.18)	17 (1.55)	20 (1.82)	12 (1.09)	9 (0.82)	17 (1.55)	19 (1.73)	21 (1.91)
農学部	農業工学科	6		8 (1.00)	13 (1.63)	17 (2.13)	11 (1.38)	16 (2.00)	6 (1.00)	5 (0.83)	11 (1.83)
	農業経済学科	5					17 (3.40)	8 (1.60)	8 (1.60)	12 (2.40)	9 (1.80)
水産学部	16	39 (2.44)	37 (2.31)	41 (2.56)	44 (2.75)	38 (2.38)	54 (3.38)	37 (2.31)	44 (2.75)	52 (3.25)	32 (2.00)
計	100	271 (4.23)	329 (3.36)	314 (3.20)	266 (2.89)	230 (2.50)	291 (2.94)	238 (2.45)	269 (2.77)	256 (2.56)	191 (1.91)

1), 2) 平成22年度入試における募集単位名と定員

このような背景を踏まえ、今後の本学 AO 入試の志願者獲得戦略に生かすべく、どのような要因が志願者の減少に影響を与えているのか検証を行った。

2.1 志願者数の推移

平成 13 年度から平成 22 年度までの本学 AO 入試志願者数と志願倍率の推移を表 1 に示す。AO 入試総志願者数は、新規に AO 入試に参加する学部等がある年度を除きほぼ年々減少している。それに伴い、AO 入試総募集定員に対する志願倍率も、初年度の 4.23 倍から緩やかな低下傾向にあり、平成 21 年度は 2.56 倍となっている。募集単位別に志願者数の推移を見てみると、水産学部や経済学部などは多少の増減はあるものの志願者数をほぼ維持しているのに対し、薬学部などは大幅に減少している。

薬学部 AO 志願者の大幅な減少の要因を検

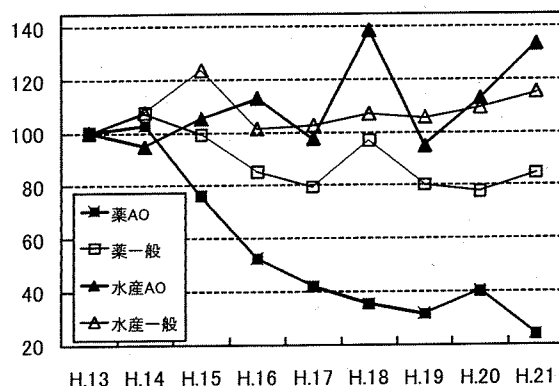


図1 薬・水産学部の志願者数の推移

証するため、薬学部・水産学部における AO 志願者数と一般入試志願者数（前期、後期日程の合計）の推移を、それぞれ平成 13 年度志願者数を 100 としてプロットした（図 1）。水産学部は AO・一般ともにほぼ横ばいで推移している。一方、AO 志願者を大きく減らしている薬学部は、一般入試志願者も若干の減少傾向にあるものの、AO 入試ほどの減少率ではない。これより、薬学部 AO 志願者の大幅な減少が、薬学部自体の不人気という要因だけで説明できるとは考えにくい。

次に、各学部志願者の道内高校出身比率の推移を一般入試、AO 入試別に調べた（図 2）。一般入試では、水産学部・薬学部ともに 50%前後で推移している。一方 AO 入試では、薬学部は一般入試と同程度の 50%前後で推移しているのに対し、水産学部は 25%前後で推移している。すなわち、水産学

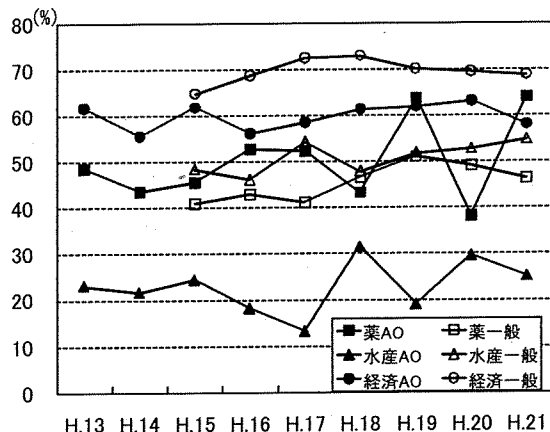


図2 志願者の道内高校出身比率

部は多くの道外高校出身の志願者をAO入試で集めていると言える。なお、水産学部と同様に志願者数を維持している経済学部では、AO志願者の道内高校出身比率は70%前後で推移している。薬学部と比較すると比率は高いものの、経済学部一般入試よりは10ポイント程度低くなっている。

このように、幅広い地域から志願者を集めることが、志願者数維持に貢献している可能性がある。今後もこの傾向が続くか注視し、道外におけるAO入試の広報活動に力を注ぐなどの広報戦略に役立てていくべきと考える。

2.2 AO入試での募集定員の充足

前節では、AO入試の志願倍率が緩やかな低下傾向にあることを示したが、平成22年度入試では倍率が1.91倍となり、ついに2倍を切った。平成21年度から募集定員の増減がないにも関わらず65名(256名→191名)も志願者が減少したことになる。これは過去10年で最大の減少であり、平成21年度までの緩やかな減少傾向とは異なる要因による可能性が考えられる。

表2は、募集定員に対する志願者数、倍率、合格者数の推移を示したものである。近年の傾向として、合格者数が募集定員を下回る募集単位が増加している点が挙げられる。太線で囲まれた箇所が、合格者数が募集定員を下回っている募集単位で、さらに倍率1.5倍以上かつ合格者数が募集定員の75%以下である箇所を網掛けにしている。

歯学部(募集定員10名)では、平成20年度は25名の志願者に対して合格者7名、平成21年度は19名の志願者に対して合格者5名と、2倍前後の倍率がありながらも合格者数が定員を大きく下回っている。これは、大学側が求めるアドミッションポリシーに即した受験者が減少しているためと考えられるが、平成22年度は9名と志願者数を大きく減らした。このように、募集定員より多くの志願者がいながらも合格者が定員を大きく下回った翌年以降に志願者数が大きく減少する現象は、理学部化学科でも見られる。

合格者数が定員を大きく下回することは、北大AO入試は合格しにくいという印象を受験生に与え、AO志願への意欲低下につながる

表2 北大AO入試における合格者数、募集定員等の推移

		定員	志願者数	倍率	合格者数	定員	志願者数	倍率	合格者数	定員	志願者数	倍率	合格者数	定員	志願者数	倍率	合格者数	定員	志願者数	倍率	合格者数
		H.13				H.14				H.15				H.16				H.17			
教育学部						2	4	2.0	2	2	9	4.5	2	2	4	2.0	2	2	5	2.5	3
経済学部		10	60	6.0	9	10	63	6.3	10	10	55	5.5	10	10	42	4.2	7	10	41	4.1	8
理学部	数学科																				
	物理学科	8	19	2.4	9	10	30	3.0	10	10	22	2.2	10	10	13	1.3	10	10	20	2.0	10
	化学科									5	35	7.0	6	5	33	6.6	5	5	20	4.0	5
	生物学科									5	15	3.0	5	5	16	3.2	5	5	10	2.0	5
地球科学科		5	24	4.8	5	5	13	2.6	5	5	15	3.0	5	5	16	3.2	5	5	10	2.0	5
歯学部		10	24	2.4	9	10	27	2.7	10	10	24	2.4	10	10	25	2.5	10	10	21	2.1	10
薬学部		15	105	7.0	15	15	108	7.2	15	15	80	5.3	15	15	55	3.7	12	15	44	2.9	10
工学部応用理工系						17	39	2.3	17	17	20	1.2	10					11	20	1.8	11
農学部	農業工学科					8	8	1.0	6	8	13	1.6	8	8	17	2.1	8	8	11	1.4	6
	農業経済学科																				
水産学部		16	39	2.4	17	16	37	2.3	16	16	41	2.6	16	16	44	2.8	17	16	38	2.4	17
計		64	271	4.2	64	98	329	3.4	91	98	314	3.2	92	92	266	2.9	82	92	230	2.5	85
		H.18				H.19				H.20				H.21				H.22			
教育学部		2	6	3.0	2	2	6	3.0	3	2	6	3.0	2	2	6	3.0	2	2	4	2.0	2
経済学部		10	63	6.3	11	10	42	4.2	9	10	46	4.6	10	10	50	5.0	9				
理学部	数学科	2	5	2.5	2	2	7	3.5	2	2	2	1.0	0	2	9	4.5	2	2	5	2.5	2
	物理学科	5	10	2.0	6	5	12	2.4	5	5	10	2.0	4	5	10	2.0	5	5	7	1.4	4
	化学科	10	25	2.5	9	10	16	1.6	9	10	17	1.7	10					10	8	0.8	3
	生物学科	5	15	3.0	4	5	22	4.4	5	5	30	6.0	5	5	18	3.6	6				
地球科学科		5	11	2.2	5	5	21	4.2	6	5	17	3.4	6	8	8	1.0	4	8	11	1.4	5
歯学部		10	20	2.0	10	10	19	1.9	10									10	9	0.9	6
薬学部		10	37	3.7	10	10	33	3.3	9	10	42	4.2	9	10	25	2.5	8				
工学部応用理工系		11	12	1.1	9	11	9	0.8	7	11	17	1.5	11	11	19	1.7	8	11	21	1.9	6
農学部	農業工学科					6	6	1.0	1	6	5	0.8	4	6	11	1.8	6	6	16	2.7	6
	農業経済学科	5	17	3.4	5	5	8	1.6	4	5	8	1.6	5	5	12	2.4	5	5	9	1.8	5
水産学部		16	54	3.4	21	16	37	2.3	20	16	44	2.8	18	16	52	3.3	19	16	32	2.0	16
計		99	291	2.9	100	97	238	2.5	90	97	269	2.8	91	100	256	2.6	86	100	191	1.9	65

と考えられる。そして、合格者数が定員を下回る募集単位が近年増加していることが、平成 22 年度志願者の大幅な減少の一因となっている可能性がある。さらに、平成 22 年度入試においても、合格者数が定員を下回る募集単位がさらに増えている。特に理学部生物科学科では、16 名の志願者に対して合格者 1 名と非常に厳しい結果となった。平成 23 年度以降の AO 入試において、これまでと同様に志願者数が減少してしまうのか注視していく必要がある。

2.3 AO 入試志願者の女子比率

女性の社会進出が進む昨今、特に理系学部における女性研究者の育成が社会的に要請されている。そこで、研究者の育成をアドミッションポリシーに掲げていることの多い AO 入試における志願者、合格者の女子比率を調べ、一般入試との比較を行った。

表 3 は、AO 志願者数、1 次選考合格者数、2 次選考合格者数の女子比率の推移とともに、男女別に 1 次選考合格率、1 次選考合格者における 2 次選考合格率の推移を示したものである。志願者数の女子比率は 40%前後、合格者の女子比率は 45%前後で推移している。一般入試等を含む全入学者に対する女子比率は 30%弱で推移していることから、AO 入試は女子学生の獲得という点で有効に機能している可能性がある。

また合格率は、1 次選考、2 次選考ともに男子より女子の方が高い傾向があるように見受けられる。

表 3 AO 入試における女子比率と合格率

		H.13	H.14	H.15	H.16	H.17	H.18	H.19	H.20	H.21	通算
女子比率	志願者	41.0	43.5	43.3	45.5	41.7	37.8	35.3	41.6	39.5	41.2
	1次選考合格者	44.2	37.6	44.0	45.5	46.6	42.2	37.5	45.5	42.4	42.7
	2次選考合格者	42.2	46.2	51.1	39.0	45.9	47.0	40.0	51.6	45.3	45.8
合格率	1次選考(女子)	61.3	57.3	67.6	71.9	85.4	76.4	82.1	80.4	85.1	73.0
	1次選考(男子)	53.8	73.1	65.7	71.7	70.1	63.5	74.7	68.8	75.5	68.4
	2次選考(女子)	39.7	51.2	51.1	36.8	47.6	56.0	52.2	52.2	45.3	48.1
	2次選考(男子)	43.0	36.0	38.5	48.1	48.9	46.1	47.0	40.7	40.2	42.8

3 AO 入試入学者の特徴

AO 入試は、課題論文や面接を用いた選抜を行うため、筆記試験のみの一般入試よりも大学側の負担が重く、当然 AO 入試入学者に対する期待も大きい。その期待は、アドミッションポリシーの求める学生像等にも表記されており、(1) 学業成績が良好であること、(2) 大学院へ進学すること、(3) リーダーシップ、独創性、創造性などの筆記試験では評価できない能力を有すること、の 3 点が代表的なものとして挙げられる。

AO 入学者の質評価は上記 3 点による検証が考えられるが、大学院重点化に伴う大学院定員の増加により、優秀な大学院志願学生の確保が難しくなっている現状を踏まえ、本稿では「大学院への進学」の観点で検証を行う。

3.1 入学時の大学院進学意欲の検証

本学アドミッションセンターでは、新入生を対象のアンケート調査を行っている。このアンケートには「大学卒業後の進路希望」に関する調査項目があり、本稿では平成 21 年度入学者アンケート結果から、入学時点における大学院進学意欲をとらえることとする(図 3)。なお、このアンケートの回収数は 2212 (回収率 86.4%) であった。

大学卒業後の進路希望として「大学院」を選択した率は、前期入学者 (47.9%)、後期入学者 (54.0%)、AO 入学者 (73.3%) となっており、AO 入学者は、前期・後期入学者に比べ 20 ポイント程度高くなっている。また、AO 入学者は大学院進学率の高い理系学部が多いことを考慮し集計した理系学部のみでの結果においても、前期入学者 (68.8%)、後期入学者 (73.0%)、AO 入学者 (83.9%) となっており、同様に 15 ポイント程度高くなっている。

そこで、AO 入学者、前期入学者、後期入学者をそれぞれ比較対照群とし、各群における「大学院」選択者数とそれ以外の選択者数

について 5%有意水準にてカイ二乗検定を行ったところ、「AO 入学者と前期（後期）入学者に進路希望分布の差はない」という帰無仮説は、全入学者、理系学部入学者ともに棄却された。同様の結果は、平成 14 年度の調査結果（山岸，2004）においても報告されており、本学の AO 入試では引き続き大学院進学意欲の高い学生を選抜できていると考えられる。また、AO 入学者は「進路未定」の選択率が低いことも注目すべき点である。

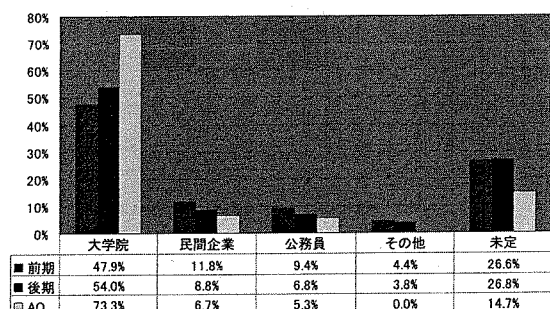


図 3 大学卒業後の進路希望
(入学者アンケート)

3.2 大学院進学状況の検証

前節にて、AO 入学者は一般入試入学者に比べ、入学時点における大学院進学意欲が高いことを示したが、本節では実際の大学院進学状況について検証する。

AO 入学者が、前期入学者や後期入学者と同程度に大学院（修士課程）へ進学していることは、平成 13 年度北海道大学薬学部入学者を対象とした調査で報告されている（池田ほか，2007）。しかし、多くの理系学部のアドミッションポリシーに掲げられているように、大学が AO 入学者に期待することは深く研究に携わっていく意欲である。無論、大学院（修士課程）への進学状況の検証も重要だ

が、より高度な研究に携わることになる博士課程への進学状況の検証も重要となる。そこで、本稿ではある理系学部 A の大学院博士課程への進学状況を検証することにした。

AO 入学者と一般入試入学者を比較対照群として、過去 3 年の博士課程進学状況を合計した値を示したものが表 4 である。博士課程進学率は AO 入学者 10.3%，一般入試入学者 9.5%と若干 AO 入学者の方が高いものの、「博士課程進学」に関して両群間に統計的な有意差があるとは言えなかった。つまり、AO 入学者と一般入試入学者は同程度に博士課程に進学したと言える。

4 今後の課題

4.1 追跡調査における課題

2 章にて、AO 入試の倍率が全体として緩やかな低下傾向にあることを示した。これは AO 入試開始時の志願者数を維持している学部があるものの、大幅に減らしている学部があり、その減少分が大きく寄与していると考えられる。この 2 群間における志願者の道内高校出身比率を比較すると、AO 志願者数を維持している学部は、一般入試より AO 入試の道内高校出身比率が低い傾向にあることが分かった。今後は、各学部の AO 入試に関する広報の状況に差があるかどうかなどの内的要因、受験する高校生や進路指導を行う高校教員側の意識の変化などの外的要因が、志願者数の増減に影響を与えているかを検証して行く必要があると考える。

3 章では、大学院博士課程進学状況に関して、AO 入学者と一般入試入学者間に有意な差はないことを示した。しかし、これはある理系学部の 3 年間のみを対象にした分析であり、さらに池田（池田ほか，2007）が大学院（修士課程）進学状況において有意な差はないことを示した集団とは異なるものである。検証の信頼性を高めるためにも、全学的な追跡調査が必要であると考えられる。

表 4 過去 3 年の博士課程進学状況

	AO入学者	一般入学者	合計
博士課程進学	3	17	20
上記以外	26	162	188
合計	29	179	208
博士課程進学率	10.3%	9.5%	

4.2 平成 23 年度以降の北大 AO 入試

平成 23 年度から、北海道大学では「総合入試」を導入するなど、学生募集方法が大きく変わる(表 5)。AO 入試においても、廃止(教育、経済、薬、理学部数学科、農学部 2 学科)、新設(医学部医学系、医学部保健学系 2 専攻)、募集定員削減(理学部化学科・地球科学科、歯、工学部応用理工系)、募集定員増加(水産学部)による再編を行う。

この大幅な入試制度改革の中で注目すべきは、前期日程において 4 学部(理・農・工・薬)の学部別募集定員が無くなり、全て総合入試枠になる点である。1 章でも解説したが、総合入試で入学した学生は、1 年次終了時に本人の希望と 1 年次の成績を基に移行する学部を決定する。つまり、移行定員の関係上必ずしも第 1 志望の学科に移行できるとは限らない。この 4 学部への所属を受験時から強く希望する学生にとって、総合入試に対する不安材料となる可能性がある。

以上の点を考慮すると、AO 入試を継続する理・工学部の一部学科では、強い目的意識を持った学生が、総合入試のみの前期日程に代わり AO 入試を受験する機会が増加する可能性がある。平成 22 年度以前との比較で、志願者数が増減するかを注視するとともに、AO 入学者の質評価のため、入学後の成績、強い目的意識、大学院への進学率等を含めた追跡調査を行っていくべきであると考え。

また、AO 入試を廃止する薬学部では、現状の学部別入試においても、薬剤師国家資格の取得を目指して受験してくる学生が多い。そのような受験生は、入学後のリスクが高い総合入試よりも、他大学の薬学部入試に流れてしまう危険性がある。他大学薬学部の志願者数の動向を注視するとともに、総合入試入学者の中で薬剤師国家資格の取得を目指す学生がどの程度いるのかを調査し、その結果次第では薬学部 AO 入試の再開等も含めて対応すべきであると考え。

表 5 平成 23 年度募集定員

学部	学科又は課程	学科等の定員	募集人員			総合入試(前期)	
			学部別入試		AO入試	募集単位	移行定員
			前期	後期			
文学部	人文科学科	185	118 (-30)	37	0	文系	30
教育学部	教育学科	50	20 (-23)	10 (+5)	0		20
法学部	法学課程	200	140 (-20)	40	0		20
経済学部	経済学科	100	140 (-20)	20	0	理系	30
	経営学科	90					
	数学科	50		13	0		37
理学部	物理学科	35		5	5	理系	25
	化学科	75		15	8 (-2)		52
	生物化学科	80		10	5		85
	地球科学科	60		5	5 (-3)		50
医学部	医学系	107	97(+12)	0(-15)	5(+5)	理系	5
	看護学専攻	70	60(+4)	0(-14)	7(+7)		3
	放射線技術科学専攻	37	28(-2)	7	0		2
保健学系	検査技術科学専攻	37	28(-2)	7	0		2
	理学療法専攻	18	13(-1)	4	0	選抜群	1
	作業療法専攻	18	13(-1)	0(-4)	4(+4)		1
歯学部	歯学科	53	30(-5)	0(-7)	5(-5)		10
薬学部	薬科学科	50		24(+4)	0		56
	薬学科	30				数学重点	130
	応用理工系学科	160		34(+4)	4(-7)		122
工学部	情報エレクトロニクス学科	180		38(+8)	0	物理重点	235
	機械知能工学科	120		30(+10)	0		90
	環境社会工学科	210		53(+17)	0	化学重点	235
	生物資源科学科	36					177
農学部	応用生命科学科	30				総合科学	250
	生物機能化学科	35					162
	森林科学科	36		53(+8)			
	畜産科学科	23					
	農業工学科	30					
	農業経済学科	25					
獣医学部	獣医学科	40	20	15(-5)	0		5
水産学部	海洋生命科学科	54					
	海洋資源科学科	53	105(-59)	50(+15)	20(+4)		40
	増殖生命科学科	54					
	資源機能化学科	54					
合計		2485	812(-1108)	478(+13)	68(-32)		1127

○内は平成22年度からの増減
網掛けはH23年度から募集定員を0とした募集単位

これらの点を考慮しつつ、平成 22 年度以前入学者を含めた AO 学生追跡調査は今後も継続する予定である。さらに、AO 入試を廃止・募集定員を削減する学部等に対するヒアリング調査も実施することで、今後の本学 AO 入試の改善に役立てていきたい。

参考文献

- 池田文人, 鈴木誠, 加茂直樹(2007). 「AO 入学者の追跡調査に基づく AO 入試の評価 —平成13年度北海道大学薬学部入学者を対象にして—」『大学入試研究ジャーナル』, 17, 51-55.
- 山岸みどり(2004). 「北海道大学 AO 入試 —平成13年度～15年度—」『大学入試研究ジャーナル』, 14, 57-62.